

# 書 評

免疫系のしくみ—免疫学入門 第4版 ▶ L. Sompayrac 著, 桑田啓貴, 岡橋暢夫 訳

**免疫系のしくみ—免疫学入門 第4版** / L. Sompayrac 著, 桑田啓貴, 岡橋暢夫 訳 / 東京化学同人 2015 / A5判 248ページ 3,200円+税

本書『免疫系のしくみ』は, Lauren Sompayrac博士が著した“*How the Immune System Works*”第4版を, 桑田啓貴博士および岡橋暢夫博士が翻訳, 監修を行ったものである。原著は, アメリカの大学で広く免疫学のテキストとして使用されている。免疫学がその複雑さ故, 学生に敬遠されがちなことから, 免疫の働き方について簡単な言葉で, わかりやすく語りかけるように説明する教科書になるように, という原著者や訳者らの意図が良く伝わってくる。

第1章の概論を含め, 全15章および用語解説と索引から本書は構成される。概論では, 免疫系がどのように外敵と戦っているかを, 個々のプレーヤーに着目するのではなく, その連携, チームプレーとして全体を見渡すことの重要性を説いている。第2章から第10章において, 自然免疫系, B細胞による抗体産生, 抗原提示の仕組み, T細胞の活性化および寛容誘導, 免疫学的記憶などの重要項目をおさえ, 要点を的確に解説している。特に, 免疫学的記憶を一つの章, 10ページ程度で説明するのは困難なことと思われるが, 緻密な構成により, 前より順番に読み進めるうちに, 自然に理解できるようになっていることに感銘を受けた。さらに第11章から第14章においては, ワクチン, 自己免疫疾患, 免疫不全, がん免疫という大きなトピックスを扱っているが, 具体例や図を用いながら簡潔にまとめられている。最終章の15章まで読むと, 免疫系への理解

が深まり, 我々の体に免疫系が存在することを, 自然に感謝するようになる内容である。的確な用語解説が付いていることも, 読者にとって嬉しいことであろう。免疫学におけるこれだけのトピックスを網羅し, かつわかりやすさを追求することは容易なことではないが, バランス度の高い充実した内容となっている。

冒頭にも述べたように, 訳者の特筆すべき点は, その内容をできる限り一般人にもわかりやすいかたり口調で翻訳している点である。「どうしてそうなるのかを説明しよう」, 「思い出していただきたい」「一つずつ説明しよう」など, 読者との距離を縮める“かたり”をうまく取り入れているため, 講義を受けている気持ちになり, 頭に入りやすい。また, 免疫系を時折アメリカンフットボールに例え, 自然免疫系を監督, ヘルパーT細胞を獲得免疫系のクォーターバックとする箇所など, 全く違和感なく自然に翻訳されており, 具体的にイメージしながら読み進められる。「二つの細胞は互いに刺激しあう活性化のダンスを踊っているようなものである」という表現も印象深い。

免疫学をこれから学ぼうとする, もしくはこれまで敬遠していた大学生にとって, 取っ掛かりやすく, さらに免疫の概要を短時間で把握しやすい書と言える。また, 大学生だけでなく, 免疫学を今後も学んでいく大学院生や研究員, また免疫学の授業を行う教員にも, 教科書としては是非薦めたい一冊である。

(加藤博己, 藤田尚志 京都大学ウイルス研究所  
分子遺伝学研究分野)